

赤尾保志 対談シリーズ

おはよう

3

【ゲスト】雨宮

慧

あめみや・さとる

【ホスト】赤尾保志

あかお・やすし

【司会】草柳隆三

くさやなぎ・りゅうぞう

まえがき

医療と宗教そして心（有限と無限のいのち）との交わりを題目に置き、各界でご活躍の方々との対談は心踊らされるものがあります。

医療では、時間が経過するなかで、経験的法則に基づき裏打ちされた技術が、活用利用されています。肉体に対し侵襲性の強い作業が行なわれるのが医療行為であるためです。

宗教は、空間の中で常に現在形の言葉で多くの物事を言い表しています。BC千百三十年クレルモンの宗教会議において、修道院内での医療行為が禁止されました。心と肉体との問題を分離した画期的なできごとでした。

この三つの題目である心・医療・宗教を当距離で論じ合おうと言うことには、この本に目を落としていただける多くの方々の問題提起を試みたいという思いがあります。夫々の専門分野の方々がその領域を超えて考える一助になることを願っております。

今回の対談を始めるに当たり、お力をお借りした方々にはこの紙面を通じて感謝の意を表したいと思えます。

平成二十一年三月吉日

赤尾保志

赤尾保志 対談シリーズ

のびる

3

【ゲスト】雨宮 慧
あめみや・さとる

【ホスト】赤尾保志
あかお・やすし

【司会】草柳隆三
くさやなぎ・りゅうぞう

「いのち」を語る

第三回

聖マリアンナ会理事長、赤尾保志対談シリーズ『いのちを語る』第三回。今回のお相手は旧約聖書が専門の上智大学神学部教授 雨宮慧さんです。

二〇〇四年、一年間にわたって出演されたNHK「こころの時代」で、雨宮先生の旧約聖書についての深い造詣と、解説の精緻さ、落ち着いた語り口は、視聴者から高い評価を受けました。

先生は、カソリックの東京教区神父としても、悩める人たちのよき相談相手になっています。

今回、ホストの赤尾さんとは、たまたま、同じカソリックの信者として、宗教者としての立場から、時代をどう捉えていらっしゃるのか、宗教を取り巻く状況や、今、宗教に求められていることは何なのか、といったことについて話し合っていました。



司会(草柳) 兩宮先生は上智大学で、今、聖書学を講じていらっしゃるのですが、先生の授業の内容はど

ういうものなのでしょうか？

それと、旧約聖書をご専門にいらっしゃるのですが、きっかけは何であったのか、その辺からお話を始めていただけませんかでしょうか。

兩宮 神学部に属しています、「旧約聖書概説」、「聖書の語る人間と神」、「知恵文学」、「予言書」などを講義しています。

私が聖書、特に旧約聖書に興味を覚えたきっかけは、神学校でのワルケンホルスト先生の講義でした。私の聖書に関する知識はゼロに等しいものでしたから、先生の講義は最初のうちほとんど理解できませんでしたが、不思議な魅力がありました。

二年目くらいからですが、聖書に対していかに思い違いをしているかに気づかされました。偏見とは、気づかされるまでは、正しいと思い込んでいる考えのことですね。これは怖いと思いました。例えば、私も、「旧約聖書は怒りの神、新約聖書は愛の神」と理由もなく考えていましたが、先生の講義を聴いているうちに、これは偏見だと気づかされました。

そんな体験があるので、私が講義で心がけていることは、聖書が語るがままに聞くとということです。

十五年前のイスラエルで見たこと

司会

先生は、毎年のようにイスラエルに行つてらっしゃるのですが、今年も春先に行かれたそうですね。いかがでしたか、あちらの様子は？

雨宮

今年はほぼ、二週間の行程でしたが、今回は学生も連れて行きました。実はもう、十五、六年前のことですが、今回のように十人ほどの学生と一緒にイスラエルに行きました。

イスラエルの国土は四国ぐらいいだし、鉄道網が殆んどないので、旅行は観光バスでの移動だったんですが、ある時、移動中にイスラエルの兵隊たちがヒッチハイカーのようにバスを停めて、「乗せてくれ」と言ってきたんです。

最近はこのようなことはほとんどありませんが、あの頃は、兵隊への尊敬心が強かったのでしょうね、運転手さんも「乗せてあげたいけどいいか？」っていうので、乗ってもらうことになりました。ライフル銃を持った人たちなので、最初は話しかける学生もいませんでしたが、そのうち、対話が始まりました。イスラエルでは女子にも徴兵制がありますから、若い女性兵士もその中にいたんです。若者同士ですからすぐにうち解けて熱っぽく話しこんでいました。

日本に帰ってから「何が一番印象に残った？」と聞くと、「若い兵隊と喋ったことが私には、す

ごく意味があつた」って言うのですね。他の人も「もう全然違う世界で、命ということと向き合つて生きてるって感じがした。われわれはそうじゃない。それがすごく驚きだった」と言つたのが印象的でずっと覚えていました。

そこで、今回のイスラエル旅行では、日本とは全く違った環境に生きるイスラエルの若者が何を考えるかを知ることによつて、自分たちのあり方を見直して、何が欠けているのか、そういうことを考え始める機会を持つてほしいと考え、ヘブライ大学で日本語を学んでいる学生たちとの交流を企画しました。学生たちも、すごく張り切っていましたね。

司会

十五、六年の時の経過というのは、相当、当時とは様変わりしていたんでしょうね。

ところで、キリスト教もそうでしょうが、仏教なども、宗教離れというんでしょうか、とくに若い人たちは関心も低いし、お寺が成り立つて行かないところも出始めているようなんですね。伝統的な宗教ほど、そうした傾向が強いような気がするんですが、今回行かれた、キリスト教の聖地、イスラエルでは、とくに若い人たちはどうでしたか？

イスラエルの若者も教会離れ

雨宮

ヘブライ大学には日本語の堪能な先生がいますので、その先生に頼んで学生たちとの交流会が開かれました。片言の日本語と英語が行き交ううちに日本の学生が「ヘブライ大学の学生たちは神を

信じているんですか？」と尋ねたんですね。

すると、ヘブライ大学の女子学生が「学生のほとんどは、神を考えていないと思うし、私も考えてない」って。それを聞いて、私、ちよつとがっかりしましてね、これは様子が違うと思ったんですね。イスラエルよ、お前もか！という感じでした。

宗教離れ、教会離れのグローバル化っていうんでしょうか。世俗化ということが、ユダヤ人社会にも入り込んでいるのだと思います。

私はそこで、こういう質問をしたんです。「例えば、親しい人が死んだときに、あなたはどのようなのか」って。すると「実は、私の親しい友人が、バスに乗っていてテロに遭い死んだことがあった」と言っんです。で、「じゃあそのときにあなたは何をしたの」と聞くと、「泣いた。悲しんだ」。「そのあとに何をしたのか」と聞くと、「抗議をした」と言っんですね、「こういう状態を作り出した政府に抗議をした」。それで終わりでした。

学生のこの発言から、直ちに信仰をなくしていると決めつけることはできないと思います。というのは、旧約聖書の中にも神に向かって嘆きをぶつける言葉は沢山あるからです。信仰がなくなっているとは言いいられないんですが、少なくとも、さっき言われたように、既成の宗教への無関心は確実に起こっていると思いますね。

今の雨宮先生のお話は、多分にイスラエルが置かれている特別な状況を背景として考えた方がいいのかな、という気がするんですが、赤尾さん、日本ではどうなんでしょうか？

日本は無宗教化に近づいている

赤尾

日本でもそれは十分あると思います。

ヨーロッパの場合、歴史を見てみますと、キリスト教が国教として認められたのが、A Cの三百九十年ごろだったと思うんですが、それが何を意味するかというですね、国王よりも、神が上の地位になった。

それに伴って、キリスト教そのものが人類に対して、心を伝えることができるようになった。神の心を伝えることができた時代があったと思うんです。それが今、イスラエルはどうか分りませんが、日本の中では、宗教離れというか、無宗教化に近づいているんじゃないか。宗教の名のもとに、逆に、みなさん宗教をなくしているんじゃないかと……。

かつて特に日本は、八百万の神がいる国と言われてきたわけですが、戦後、がらっと変わってしまった。

心を鍛えるといいますが、戦後の日本の教育の中で、家庭内でもそうですけれど、学校の間でも、心を鍛えるということが殆んどなくなってきたのではないんでしょうか。宗教心を持つか持たないかは、やはり「こころ」の問題がそこにはあるわけですから。

カトリックの教会も今、何をなすべきかということを、もう少しきちっと世の中に対して伝える

司 会

べき時期に来ているのではないかというふうに思います。

もともとキリスト教に限らず、宗教に近づく、心を惹かれるというのは、それぞれが抱えている悩みだとか、迷いとか、そういうものを何とかして解決していきたい。ただ、自分一人では、人間の力ではどうにもならないということが、宗教に入るきっかけとしてあるのだと思うんです。

でも、いまお二人の話をお聞きしていると、どうも様子が変わってきている。宗教を取り巻く環境が変わってきているということもあるんですが、宗教そのものが人々の根源的な問いかけを受け止められなくなってきた、十分に答え切れなくなつて、その結果、人々との間に距離が出来はじめている、という気がするのですが、どうなんでしょうか？

赤 尾

答えてはいると思います。

しかし、答えてはいるけれども、受け取る側が分からない、理解できてないんです。質問する側が答えを受け取れない、ということがあるのではないかと、そのことを非常に私は危惧しますね。

ひとつには、それは、日本語のブーサーといいますか、貧しさが現われている可能性があると思います。特に日本語というのは、非常に多様なニュアンスを持った言葉で、世界の言語の中でも珍しい言葉だと思うんですけど、これもまた戦後教育の中で単純明快な答えしか求めなくなつてきている。短絡的な受け取り方はできるけれど、そのニュアンスの使い分けは相当難しいことになつてしまった、と思うんです。

神というのは、非常に複雑だと思うんです。何が複雑かと言いますと、「神は愛である」という

言葉があるんですけど、この「愛」という言葉は、ギリシャ語では四つくらいの言葉の意味に言い換えて使っているんです。なかには、日本語に訳せない言葉もあるのです。

「アガペー」という言葉。これは日本語にどう訳せばいいのか、多分、正確に答えられる方は非常に少ないのではないかと、という感じがします。

そのほかに、フィリアとか、ストルゲー、エロスという言葉もあります。キリスト教の場合、エロスというのは新約聖書の中には一回も出てこないと思います。これは旧約の世界だと思えます。エロスというのは、男女間の愛を言ってるんですが、これは日本語にもあります。それから、ストルゲー、というのは家族とか、非常に身近な人たちとの愛のかたちで言いますかね。フィリアというのは、例えば友情という言葉に置き換えられます。

アガペーは何かという、これは非常に難しいですね。神様の言葉から感じるの、くじけない愛情とか、破れない善意。そういう理性的な愛を、アガペーという言葉で表現しているのではありませんか。日本には、現代社会の中で、このアガペーが本当に存在するのか、日常生活の中でアガペー的な愛情がきちっと保たれているのかどうか。その辺、神父さまはどうお考えでしょうか？

「情けは人のためならず」

雨宮

そうですね、草柳さんの話されたことから考えてみますとね、聖書の信仰の中で一番大事なのは、

やっぱり、かわりかなと思いますね。かわり、といったときには、もちろん人と人との関わりもありますし、それから、人と神とのかわり、もありますよね。

いま、赤尾さんがおっしゃったのは、人と人とのかわりとして、フィリアという言葉を使ったり、人と神とのかわりでは、アガペーという言葉を使ったり、ということだと思います。しかし問題は、日本人が考える神と、聖書が考える神、それから聖書が考える人間と、われわれが考える人間の間に、やはり、ズレがあるかなと思います。そのズレを説明したいと思います。

「情けは人のためならず」という諺がありますよね。これは「情けは他人のためでは終わらずに、自分のためにもなる」の意味ですが、最近「情けはその人のためにならない」の意味にとる人が増えているといいます。

どうしてこのような間違った解釈が行われるようになったのか、それを説明している文章を読みました。それによると次のようなことでした。

現代の日本社会では、人と人とのかわりが薄くなって、むしろ個人の要求を中心に置く人が多くなっている、それがこれまでの解釈をひっくり返したと言うのです。昔なら、困っている人がいれば、その人を助けるのは自然の情であった。けれども、人と人とのかわりが薄くなった現代では自己責任に重点が置かれて、「情けをかけるのはその人のためにならない」という誤解が生じたという説明なんですね。

私、それ聞いて思ったのは、日本で人と人とのかわりが濃密であった「古き良き時代」に日本

人が神とのつながりを意識していたかどうか、と考えると、意識することはなかったのではないのでしょうか。

しかし、神の愛を世に示すために来られたイエスは、「私があなたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と説いています。人に対する神の愛が隣人愛を可能にするわけです。つまり、我々が「情け」について語るとき、人間相互のかかわりが濃密であった時代でも、神の「情け」は視野に入ってはいませんが、聖書では、人間相互のかかわりの根本には神の「情け」があるのであって、それなしには隣人愛は成り立たないし、正常に維持されることはない、と理解されています。

日本では、人間関係が濃密であった時代でも、こういう意味での神と人との関係は考えられていないと思いますね。

それ、どういうことですか？

日本の場合には、困った人を見れば助けるのは自然の情で、それが生きていた時代があったのだと思います。人間不信はさほど問題にならなかったのかもしれませんが。

聖書は、「人間ってそんなに立派ではない、むしろ欠けた存在だ」と見ています。もちろん、どんな人間も自分の弱さを認めるでしょうが、努力によって克服できると考えているのではないのでしょうか。努力が大事なのは言うまでもありません。しかし、努力には限界があって、自助努力ではどうにも埋め合わせられない弱さがある、と聖書は理解していると思います。

神がいなければ収まりがつかない？

司会 平たく言えば、ヨーロッパなどキリスト教圏の場合には、人間の社会というのは、神様がいな

れば収まりがつかないよ、とそういうことですか？

雨宮 そう。そう言つてよいと思います。神様という存在を前提にしない限りうまくいかない、と聖書

は考えています。その点がまず、日本人には分かりにくいところでしょうね。

だから、赤尾さんがおっしゃったアガペーという愛ですが、その完全な形は神の愛の中にあると見ています。人と人の間にアガペーがあり得るとすれば、神の愛に出会ったときだと説いています。ストルゲーやフィリアは、神の愛を知らなくても、可能ですが、アガペーはそうはいかないと思います。

司会 なるほどね。ですから、赤尾さんが最初におっしゃったように、受け取る側の問題でもあるとい

うのは、つまり、そういうことなんですね？

雨宮 そうですね。人間の限界の受け取り方によつて大きな違いが生じると思います。

神の愛のかたち、無限ということ

赤尾

イエスは、「私が病気のとき汝は見舞った」とおっしゃられたのです。これは非常に意味の深い言葉だったと思うんです。「手を差し伸べた」ということは、命というものは有限かもしれませんが、慈悲とか善意というものは無限であると……。それを続けることが大切であるという意味と解釈しても大きな間違いではないかもしれません。

われわれ医療関係者からみると、医療というのは非常に狭い分野だと思うんです。ところが、イエスのその言葉は、看護という非常に大きな、すべてを包み込むような言葉だったと思うんです。その辺の理解力が今の日本の若者たちを含めて、あるのかないのが、アガペーという神の愛のかたちを受け取れるかどうかということの、一つの分岐点になってくると思います。

司会

さきほど雨宮先生から、「情けは人のためならず」、というコトワザの解釈が変わってしまったというお話がありました。人間関係が濃密だった時代には、そのコトワザの意味は、他人に情けを施せば、それは巡りめぐって自分に帰ってくる、ということだったと思うのですが、今はそうではない。人間関係が薄くなった、あるいは人間不信のなせるワザ、ということなのでしょうが、赤尾さんはどう見てらっしゃいますか？

赤尾

やはり、感謝という気持ちが非常に少なくなってきた。みなさん、心の中では持っているの

司 会 赤 尾

でしょうが、それを表現しなくなってきたということは言えるんじゃないでしょうか。

なぜそうなったとお考えですか？

過去の歴史を見てもやはり、一つの大きな文化が変わるとき、産業が変わっていくとき、生活習慣が変わっていくようなときには、必ずそういう溝ができることがあるのではないかと思います。日本はいま、それに直面しているのかもしれない、そう思うんです。

であるからこそ、神に対する理解力を深めていただけるような教育というものが必要になってきて、なおかつ、人から与えられる、そういう感謝とか愛情というものを、素直に受けられるような社会をどうやって作っていったらいいのかというところが、今の日本では薄れているのかもしれない。

雨 宮

私もたしかに人間関係が薄くなってきているという思いはあります。

たとえば、この間、大阪でパチンコ店に火をつけた男がいたという報道がありましたね。本当のところはまだわかりませんが、もしそれが事実だとすれば、多分、自分を受け入れてくれるところがないと思い、自己主張というか、「ここにわたしがいる」というのを示したかったのではないのでしょうか。

放火そのものはもちろん認めることはできませんが、そういう気持ちになるのは、分からなくもないですね。

この事件が端的に示したことは、日本社会における人間関係の希薄さではないかと思います。

司会

確かに、今起こっているいろいろな事件、出来事などを見てみると、そうなのかなって感じがするんですね。

ある評論家が、今の日本というのは社会の底が抜けてしまったような、そんな状態じゃないかって言っているのです。社会の底が抜けてしまったというのは、それまでは、例えば道徳であるとか倫理だとか、あるいは宗教の教えということでもつて、辛うじて社会の秩序が保たれていたと……。

ところが今は支えの底が抜けてしまった。もう全く、ルールのない時代に日本は入って来てしまったのではないか、ということを書いていたんですが、赤尾さん、どう思われますか？

赤尾

端的な例としては、年間におこる殺人事件の半数近くが尊属になつてきて、子供が親を、親が子供をあやめてしまう。常識では考えられない事件が日常茶飯事的に起きてるところに、大きな誤りがあると思うんです。

シエルターというものが社会からなくなっているんじゃないかと思うんです。

司会

シエルター？

赤尾

ええ、逃げ道。昔は家族の中でも十分その逃げ道があつたんですね。兄弟喧嘩をしたときに、おじいちゃん、おばあちゃんが入って来て、「やめなさい」とか。それから、近所の子供たちが遊んでいるときに、縁台に座っていたおじいちゃんとかおばあちゃんが、「そんなことしたらだめだよ」と注意してくれる。

今、日本の社会で他人の子供を注意したら、その子の親が、注意した人を追いかけて来て文句を

言うという社会になってしまった。

これは、いま話に出ていた、底が抜け始めているというか、すでに抜けてしまっているのか、いずれにしても、どうやって修復するかということでしょうね。多分そのための現場の技術施工を早く進めないといけない時代に入っているのかもしれない。

司会

技術論、とおっしゃるのは？

赤尾

修復するための技術。抜けてるかもしれないじゃなくて、すでに抜けてるということを認識した上で修復する技術です、必要なのは。

司会

そうしたお考えの根っこには、社会の構造や仕組みが益々複雑になってきて、変化のスピードも速い。今のうちに打てる手を打っておかなければというご認識があるのでしょうか。

とりわけ進歩の激しい、例えば現在の生命科学などと、どう折り合いをつけていくことができるのか、というような問題も当然出てくるのでしょうか。

赤尾さんの医療現場などでは特にそうでしょうが、科学技術の成果をどう使っていけばいいのか、判断の難しいことも結構あるんでしょうね。

人を取り巻く外側の環境が、あまりにも激しく変化すると同時に肥大化してしまって、利便性 hands に入れたけれど、その代り、人と人との関わりもおかしくしてしまっているのではないか、という指摘もあるわけですね。

ただ、赤尾さんのおっしゃる修復ということを考えたとき、外的条件の急激な変化に対応してい

くためにも、個人個人の内側の問題をどう見たらいいのでしょうか？

雨宮

私は聖書の講義を通して学生と付き合っています。最近の学生たちは文章を読む力が弱いと思います。私の講義は聖書本文の分析を中心に行っています。構文とか語彙に注目して、その個所を分析し、そこから聖書のメッセージをくみ取るという方法ですが、「先生、そんな面倒なことをしないで、もっと要領よくまとめて下さい」と言われかねないのです。出来上がった答えの暗記が勉強だと思っているのではないのでしょうか。自分の頭で考えるという訓練が欠けています。底が抜けたというとき、そこが一番気になります。

司会

さきほど私がお聞きしたいなと思ったのは、人間の、一人ひとりの心の中に、自分自身がコントロールできなくなっているような何かが、どんどん肥大化しちゃっているんじゃないかという気がしてしょうがないんですね。

コントロールの装置のタガがいったん外れてしまうと、そのことが例えば幼児の虐待につながったり、あるいは、もう本当に理由も説明もつけようのない出来事に突っ走ってしまう、そのことにつながっているのかな、という気がするんですね。

人は神の被造物、目的を持って造られているのです

赤尾

私はこんなふうに考えるんです。

例えば、教会に行く回数が減る、または少なくなつて、ついに行かなくなる。

黙想という言葉がありまして、いかに神との会話を自分自身で心のつながりを持つてするかということです。その中で、人間というのは、それなりの目的を持つて神様が造られたと思うんですけど、その目的に適うためには何をすべきかという問いを、個人個人が神様に向けて発するべきだろうと思うのです。ところが、現実には社会の複雑化、システムの高度化などで、そういう余裕を持ってない社会になつてきているのではないか。

その辺は、やはりもう一度修正し直さなければならぬ時期に来ているでしょう。

それによつて初めて、確かに学問を究めるということも必要ですけど、心の中の学問をもう一度究めて、それはいかなる宗教にあつても大事なことと思うのですが、出来る限りその中で問いかけをしてみると……。その答えが何であるかを。

と同時に、社会を作るといふ努力、人間社会を作るといふ努力をするべきです。そこに、さきほど、神父さまもおっしゃいましたが、交わりとか、かかわりというものを、どう大切にするかというところが本当の意味で分かつてきて、初めて社会が成立するのだと思うのです。

ところが、その辺があまりにも、現在は機械的になり過ぎていて、なかなか人の心を慮つて、互いに認め合うということがなくなつてきているのではないかという感じがします。ですから、出来る限り、そこをもう一度修復するといえますか、深呼吸のできる日本の社会をもう一度作り直さなければいけないかもしれません。

そうですね。草柳さんのおっしゃる「自分自身をコントロールできなくなった」人は増えているかもしれません。勉強についての指導のことですが、こちらは指導のつもりなのに、批判として受け止め、思わぬ反応をする学生に出会うことがあります。

臨床心理の専門家から伺ったことですが、「自分のある面を過大に膨らませ、それを壊されると、攻撃的な反応をする人が増えている、そのような人の指導は難しいけれども、膨らんだ部分を壊す前に、他のところに別の風船を膨らませてあげるべきだ」というのです。

それを聞いて、私が「風船を次々と作り替えるうちに、本人が気づくということですか」と尋ねると、「気づくということはないかもしれない」という答えでした。それを聞いて、「ということは本質的に解決がないということではないか」と思いました。

現代の、複雑な社会の仕組みの中で、自分を取り巻く様々なことに一つひとつ丁寧に反応しようとして、結局、自分自身をコントロールしきれない状態に追い込んでしまう、ということなのかとありますが、現在の時代状況がそれを助長しているのかもしれない。

さきほど赤尾さんが、イエスは総合的な看護をしたのではないか、とおっしゃっていましたが、聖書を教えるよりは、その人につき合うことを大事にすべきであり、イエスはそれを選んだのかもしれません。

今のことにもう少しこだわってお二人のお考えをお聞きたいんですが・・・。
ある社会心理学者が、常識では考えられないような事件や、そこでの人の振る舞いを見て、人間

というのは「本能が壊れた動物」なのだ、と言ったことがあるんです。動物は、まっとうな本能を持つていて、むしろ動物の方がルールのある生き方をしているんじゃないか、ということなんです。今の雨宮先生のお話と関連してくるのかも知れないのですが、問題は、外側にあるというだけではなく、むしろ人間の内側にあるんだということなんじゃないか。現実の世界を見れば、もう、さまざまな忌まわしい事件や出来事が頻発していて、人間の仕業に思わず背筋が寒くなる、そんな思いを持っている人も大勢いるのではないかと思うんです。

赤尾さんが先ほどおっしゃった修復というのは、そのところも含められると思うのです。赤尾さんは技術という言葉を使われましたが、どうすればいいということでしょうか？

大事なことは、すべてを許せるような社会を実現させることです

赤尾

いちばん簡単なのは、恐怖心を取り除くということでしょう。

イエスが実際に行動を起こされたことは、ユダヤ教の安息日にも手を差し伸べていた訳です。それをとがめられて、ユダヤの律法学者とのいざこざが出て来て、結局は、ローマ人に刑死させられてしまう。その過程の中で考えると、安息日があつて働いてはいけないときに、イエスが、施をしたり、治療をしたりといった、手を差し伸べたことをとがめられた訳です。

大事なことは、常に、すべてを許せるような社会を作り上げることが、個人個人の恐怖心をうす

らげることもできることになるのではないか。そういった社会をどう作ればいいのかということだ
と思うのです。

司 会

話の方向を少し変えて、宗教と生命観といったことについて話し合っていただけかもしれません
か？

このところの生命科学の分野の発達、発展には目覚ましいものがあって、象徴的なこととしては、
早晩、人の遺伝子情報というのが全部明るみに出て、遺伝子管理社会が生まれる可能性だってある
わけですね。

そういう時代になってくると、「いのち」とはいったい何であつたのか、生命観といったものも
変わってくるのでは、と思うのですが、雨宮先生はどんなふうにお考えですか？

清く された体の向こうに 癒し を見たのです

雨 宮

その問題で私いつも思い出すのは、ルカ福音書の十七章です。その部分、読んでみますと

《イエスはエルサレムへ登る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い
皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くのほうに立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエ
ス様、先生、どうかわたしたちを憐れんでください」と言った。

イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って体を見せなさい」

と云われた。彼らはそこへ行く途中で清くされた。その中の一人は自分が癒されたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足元にひれ伏して感謝した。

この人はサマリア人だった。そこでイエスは云われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに神を賛美するために戻って来た者はいないのか」。それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」、という物語なんですね。

イエスは、清くされたのは十人ではなかったか、ほかの九人はどこにいるのかと言っていますから、九人と一人の違いというのをすごく意識してますよね。そこで、九人と一人が、どこから別行動を取り始めたかということを考えると、イエスに祭司たちのところに行って体を見せなさいと言われたあと、「彼らはそこへ行く途中で清くされた」と書いてありますから、ここまでは、十人一緒だったはずですよ。

そのあとに、その中の一人は自分が癒されたのを知って、大声で神を賛美しながら戻ってきて、イエスの足元にひれ伏して感謝したとあります。そうすると、重い皮膚病の患者は、患部がきれいになったということであれば、十人が全員知っていることになります。ところが戻ってきたのは一人だけで、戻るきっかけは、自分が癒されたということを知った、ということですね。

ルカは動詞を変えています。祭司のもとに行く途中、十人が気づいたことは「清くされた」ということですが、イエスの元に戻ってきた一人の人は「癒された」ということです。この二つの動詞

を調べてみますと、「清くされた」は清淨規定、ユダヤ教には清淨規定がありますから、その規定に則って清いということの意味しますから、我々の感覚で言えば「病気が治る」ということです。しかし、「癒された」の方は、転義した意味でもつかわれ、「罪が癒された」の意味にもなります。

多分、ここでの「癒された」は単純に「病気が治った」では終わらずに、それ以上の意味を持っていると思います。そうであれば、このたった一人の人は、清くされた患部の向こうに、癒しを見たということであり、もつと言ってしまえば、自分の「いのち」に無関心ではいけない、慈しみの指を見たということだと思います。

だから、清くされるというのは、患部がきれいになるということ、ところが、癒されるということは、清くしたもののかかわりの中に入ることであり、そのかかわりのことを癒しという言葉で表しているのではないか。だから、イエスの言葉は、「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか」であって、「癒されたのは十人ではなかったか」ではないわけですね。ですから、清くされるということと癒しということをイエスは分けていいます。それは、赤尾さんが最初におっしゃっていたことと重なっていると思うんです。

すべての癒し手を神と見るのか

兩宮

医療科学の主目的は、清くすることだと思います。しかし、ルカ十七章が教えているよう

に、それを超える何か、つまり、真の癒し手を考慮するかどうか、大事なポイントではないでしょうか。

医療科学の進歩はもちろん必要なことで、私自身も去年、心臓の治療を受けたんですが、カテーテルで頻脈が見事に止まりました。しかも、三、四時間の手術中、すべてが見事にコントロールされていて、最初のカテーテル挿入は「あ、入れたな」とわかりましたが、気がついたときには、痛みも何もなくすべてが終わっていました。

その後、頻脈で苦しむことがまったくなくなりました。こんないいことはないわけですから、医療技術の進歩はなければならないことです。

けれども、聖書の発想は、そこで終わってはいけません、真の癒し手に気づくことが大事であり、そのために何が必要かが課題になります。

ちなみに聖書で「感謝する」と訳された言葉は「信仰や罪を告白する」、という意味もあります。日本語の「感謝」には「告白」の意味はないでしょうから、日本人の感謝は、告白にはならない感謝だと言えます。しかし、聖書の「感謝」は「告白」につながる感謝です。そのあたりを理解してもらえるために何が必要なのか、ということがポイントになります。

非常に大切なことは、一人の人間が生きているという言葉ではなくて、神によって生かされているという求め方のほうが正しいのではないかと思うんです。

私たちの“命”は神から与えられ、神によって生かされていると考えたとき、例えば医療という

ものは、どうなされるべきかという答えは、自ずと導ける可能性が出てくると思います。

「清くなる」ということが身体の病からの回復ということであれば、現代の医療科学の進歩は目覚ましいものがあつて、多くの命が救われているわけですが、一方で、私たちの命は神から授かったものと考えたとき、二つの「命」がどう融合できるのか、社会がそれをどのような理解のもとに受け入れるのかということが非常に大事になってくると思います。

科学の進歩は否定すべきものじゃないし、むしろ大いに未知の分野を切り開いていつてほしいと思います。ただ、欲望のなすがままに突っ走ってはいけないということだと思います。医療も一定の倫理観を、と言いますか、私どもの立場で言えば、人間として生かされているのだということのなかで、どこまで求めたらいいのか、ある程度、自らが決めるべきかもしれません。

司会

具体的なこととして、例えば、脳死を人の死と認めるのかどうか、臓器移植はどうなのか、あるいは、遺伝子操作はどうなのか、といった問題が次々と出てきています。そうした問題について例えば、カトリックの総本山、バチカンなどはどのような反応をしているのですか？

赤尾

臓器移植を例にとれば、基本的には、行為そのものには反対はしていない。ただ、そこに至る過程をどうきちんとするかということは大事だと思います。

バチカンも進歩ということについて認めているわけですから、その進歩の過程を正確に理解するということが必要になってくるというふうに思います。しっかりした理解の上に立った判断。医学界もそうでしょうけれど、宗教界が、進歩する科学の成果をどう判断していくかということは、こ

司会

れから益々重要になってくると思います。

先ほど、雨宮先生が紹介してくださった聖書の一節なんですが、その中で聖書が言おうとしていた「こころ」は何だったのか、もう一度お聞かせいただけませんか？

雨宮

聖書は「命」というものを質のあるものと捉えていて、つまり、心臓が動いていけばよいというわけではありません。聖書はしばしば「人の前には二つの道、死への道と命への道が置かれている」という言い方をするんです。命は自分で作り出したのではなく、与えられたものですが、それを何に使うかという問題です。使い方を間違えれば死に至る道を歩むことになり、使い方が正しければ、命に至る道に生きることになる。と、捉えています。

心臓が動いていなければ話にならないし、動いていることは大切ですが、動いている身体を何のために使うか、それが重要だということです。

九人の重い皮膚病を清くされた人たちも感謝していないはずだと思います。ありがたいと思っただけです。重い皮膚病の人は、村から隔離された生活をしているわけですから、死ぬ前にもう一度子供の顔を見たいと思っても不思議ではありませんね。そんなとき、思わぬ仕方で清くされました。子供が待つ家にすぐに向かったとしても当然のことです。

それは当然ですが、この九人が与え直された命を用いたのは、自分の願望や夢を実現することのほうに向って行ったということだと思いませんか。自分の命を何のために使うかということで、この九人は結局は自分の夢と願望のために使いました、ということになるんでしょう。それに対して、

癒された、ということに気づいた一人は、神とのかかわりの中に生きる道を選んだということになるんじゃないかね。

ですから、命というものには、質があって、どういう質のものとして自分は捉えているのか、それが問われているのではないでしょうか。

社会全体が軸を失って漂流している感じですね

赤尾

命は与えられたものとみるのか、自分のものであると考えるのか、そのところでしょう。命は自分のものですよと主張すればするほど、死に近づくだろうし、命は与えられたものであると捉えていけば、それは永遠のものになっていく。

イエスの復活は、精神的な復活を意味する神への近づきだったのではないのでしょうか。神を信ずることによって永遠の命を与えられる、そして、それを確信することによって、そこから導き出される倫理、といったものを、それぞれの生き方にどう生かしていくかということなんでしょう。

今の日本人は寄って立つ軸を見失っている、というのか、社会全体が漂流しているというのか、そんな中で命をむやみに落す方もおられます。自殺者が少しも減らない、尊属殺人も相変わらず多い。与えられた命をどう生かしていけばいいのか、やはり宗教者も、もっと正面からこの問題と向き合うべきだと思っております。

司 会

そのためにはいったい何が必要なのでしょう。宗教は、ずっといつの時代でも、「いのち」の問題と向き合ってきたのではないかと思うんですが、現状は人々の宗教離れ、というか教会離れ、寺離れという現象があるようですね。

今、現実の世界で起こっている、生老病死に関わるさまざまなことを見ていると、とくに医療科学の分野での「命」をめぐる問題などを見ると、今こそ宗教の出番ではという気もするのです。宗教は現実の問題にどう向き合おうとしているんでしょうか？

雨 宮

どうなのでしょう。神様を信じるということは、解決策を直ちに見出すとは限らないと思います。神の働きを信じるわけですから、希望を捨てずに解決策を模索するということです。信仰が与えるのは希望であって、具体的な解決策ではないと思います。我々はすべきことを一つひとつ行う他に道はないのではないのでしょうか。

司 会

すべきことって何ですか？

雨 宮

すべきことは、人によって違います。神父として生きる私の場合でしたら、イエスを通して神は何をしたか、それを述べ伝えることです。たとえば、私も上智に入学したときには、神を信じるのは、幽霊の存在を信じるくらいのバカなことと思っていました。

その後いろいろなことを知るにつけ、私自身が変えられたっていうか、信仰という生き方もあるかと教えられました。

だから、キリストを信じる者がそれぞれの場所ですべきことをして、あとは神様の働きに信頼し、

希望を捨てないことだと思います。

まずは立ち止まることのできる社会を……

赤尾

立ち止まることのできる社会をまず作ることでしょう。

時間に流されて行くのではなく、時間はすべての人に平等に与えられている道具ですから、その道具を上手に使うということが必要だと思います。それと同時に、やはり、他人を思いやるということですかね。おしつけの思いやりではなくて、素直に受け入れられる優しい柔和な思いやりが必要なんです。

とくに、医療に従事させていただいているわれわれ健常者からみますと、疾病があるとかないとかではなく、互いに受け入れられるような、そういう心で接することが一番重要だろうと思います。おいしい空気を胸一杯吸えるような、そういう時間の使い方というのを、より多くの人たちが求めていけば、少しは安定するんじゃないかという感じはします。

（同席編集者）

命を語る以上、死を考えなければいけないわけでしょう？死を考えると機会が今、少ないですよね。お葬式そのものも、大家族主義はもう崩壊しているから、接する機会が非常に少ない。学校で教えることもあまりないだろうし、私自身もまだ親が健在なものですから、自分で本当に身近に

家庭の中で暮らした人間を見送るという経験をしたことがないんですね。

死を間近に生活することがないということが、命を粗末にするような現象を生ずる原因の一つになっっているんじゃないかな、と思うんですね。

死の悼みや哀しみに鈍感になっているということも、常識では考えられないようなことが起こっているということに、つながっているんじゃないかなと思うんです。

ところで、医療の世界では、新しい科学とそれを医療現場でどう生かしていくかということを考えたときに、そこには倫理面でも解決しなければならなことが起こってくると思うのですが、とくに赤尾さんの携わっている精神医療の場では、まさに“ここ”と正面から向き合うことになるわけですね。

赤尾

そうしたときのキーワードは「寄り添う」ということでしょうか。

イエスが活動された四年間のほとんどは、今という精神科医のような仕事だったと思うんです。地方の言葉を使ってみんなに語りかけた。その語りかけに対してたくさんの人たちが集まって耳を傾けた。そこから癒しという問題が出てきた。精神的な安定を得られた人たちがたくさん出てきたりとか、ということがあったんでしょう。

本当に病氣の人たちには多少の施術はされただろうと思います。しかも、それを休みなく行うことが重要だということも言っているわけです。多分、われわれ医療に携わる者も、本来は、三百六十五日、二十四時間、ほんとは門戸を開けておくべきと思うんです。いつでも受け入れる体

制を取るべきだと思うんですが、それは非常に難しいことです。

シエルターが必要なんです。いつでも飛びこんで行けるところがあれば、二十四時間開いていれば、それはできる可能性はあるんです。

司会

身体の病ならば救急システムというものもありますけど、心の問題で弱っている人たちのための、まさにシエルターの機能を果たすシステムが必要ということなんでしょうか。

昔の日本にあった駆け込み寺、とは少し違うのかもしれませんが、実は、寺というのは二十四時間ちゃんと開いていなければだめなんだ、といってそれをちゃんと実践しているお寺もあるようですね。

それが、宗教に携わる者の、あるいは医療に携わる者の役目というか、役割じゃないかって、その寺の住職さんが言っていました。

旧約の時代、人々の興味は死後の世界にはなかったのです

雨宮

もう一度、聖書の話で申し訳ないのですが、旧約聖書の面白さの一つは、死についての考え方です。たとえば、ダビデの死について書いている個所で、ダビデは息子ソロモンに「私はこの世のすべての者がたどる道を行こうとしている」と述べて、そのあとに、自分の半生を振り返って、誰を信頼し、何をなすべきか語っています。

一言でいえば、神に従え、ということです。これを遺言として息子に与えて死んで行きますが、その死を書くのはたった一行であり、「ダビデは先祖とともに眠りにつき、ダビデの町に葬られた」と書くだけです。

面白いと思うのは、まず、死を「この世のすべての者がたどる道」と表現していることです。死は「すべての者がたどる道」ですから、異常なこととは捉えてはいません。人が然るべき齢を満たして死ぬのは不思議ではなく、当然なことと受け止めているのです。この考え方の根底には、人は神の被造物だという考え方があってと思います。行くべきところに行こうとしていると言っているわけですから、死というものを異常なものとして捉えていないんですね。然るべき人が齢満ちて死ぬという、これは不思議でもなんでもない、当然のことだというふうを考えるわけです。そういう考え方の根底にあるのは、やっぱり神に作られた被造物であるという考え方があってと思います。

もう一つのことです。旧約聖書は、葬儀への興味をほとんど示してないことです。ダビデは英雄的な王ですから葬儀は盛大だったと思われるですが、外国からの弔問客についても、葬儀の模様について、墓の豪華さについても何も述べていません。「ダビデは先祖とともに眠りにつき、ダビデの町に葬られた」で終わりなんです。

旧約の時代における人々の興味は、死後の世界にはないんです。彼らの興味は、今ここで、与えられた命をどう生きるかにあるんですね。

これは現代人が受け入れやすい考え方ではないでしょうか。

復活という考え方が出てくるのはずーつと後のこととして、新約聖書に近づいてようやく、出てくる新しい見方です。当時、セレウコス朝がイスラエルを支配していたのですが、ゼウス神を礼拝せよと強制した王がいて、それに対する反乱が起って戦争になりました。一所懸命に神のために戦った人が死んで終わりでは困るということから、復活という考え方がペルシャから入ってきました。

だから最初のうちは、正しい人だけの復活なんです。悪い人は復活しないんです。このことは新約聖書の中にも痕跡があります。たとえば、詩編の中にはこんな詩もあるんです。今まさに、死にそうになっている作者は神に、「黄泉に下ったならば、あなたを感謝することができるか」と訴えています。

これは死人に口なし、と言おうとしているのではなく、「神様、黄泉に下ったら、あなたはもう何もできないでしょう、だから今、私を救うことが、あなたが神であることを私が知る最後のチャンスなんです」と言ってるんですね。

こんな言い方もしています。「今、あなたが救わなければ、あなたは優秀な宣教師を一人失うことになるですよ、いいんですか」というような言い回しも使っているんですね。

ですから、旧約聖書のすぐく面白いところは、今ここで、与えられた命をどう使っていくかという集中していることだと思えます。そして、現実のあるがままの人間を決して否定していないということなのです。現実を否定しないで、でも、現実止まってもしょうがないと。

それを模索しているんですね、一所懸命。その面白さだと思うんです。

「死」というものを意識しない生き方、人は変わりうるか

赤尾

死というものを意識しない生き方をするべきだということだと思うんです。生の延長線上で、当然現実的には死が待ち受けているわけですが、死に行く人は決して死を望んでいるわけではないかもしれません。

先日、ある方が亡くなられたんですが、その人はカトリックの信者のお医者さまでした。亡くなられる、二、三週間前にお会いしたんです。死は怖くなくなつた、とおっしゃるんです。楽しみになつたと。なぜなら、これで神様のところに行ける、これほどの喜びはないと言われたんです。この方は、耳のガンを病んで、聴覚が失われているので、筆談で言葉を交わしたんですが、驚いたのは普段よりもにこやかで、苦しみがなくなっているように見えたことなんです。

神のもとに向かっている、そちらに向かっている、そういう精神状態を本当の死というのかなと思いました。

自分の残された生はあとのくらい、と分かったときに、人生は素晴らしかったといえる感覚、俗人にはとてもできないと思いました。いまの私には。

ですから、それを神様が求められているのかもしれない。それが神様のいう死というものかもし

雨宮

れない。自分の御胸に戻っていらっしやいということなのかもしれません。

毎日患者さんを見ていて、当然、亡くなる方もおられるんですけど、そういう方々の心情はどうかを考えます。ただ、われわれに出来ることは、医療人としては、いかに苦しみのない状況を作れるか、ということがひとつ、あとは、ご本人がどこまで本当にこの世に生を受けて以来、楽しかったかという、そういう雰囲気を作るのがわれわれの仕事なのかもしれません。

人間は変わりうるか、ということなんですが、去年、ノーベル賞をもらった益川教授が「二十一世紀は自然科学的なものは進歩しているが、平和で豊かな世界ができていくか。そうじゃないですよね。」とおっしゃったと新聞記事で読みました。

そのとき、私はこんなことを思いました。今、私が住んでいる部屋と旧約のダビデの部屋を比べたとき、私の部屋にはパソコンがあり電話があつたり、ファックスがあつたりしますが、ダビデの部屋にはそのようなものは何ひとつないんですね。

ところが、ダビデは昼寝から覚めて屋上を散歩しているとき、美人の人妻、バト・シェバが水浴びをしているのを見て、宮殿に呼び、床を共にします。その後、バト・シェバから子供を宿したと知らされたとき、戦場に出ていたバト・シェバの夫ウリヤをエルサレムに呼び戻し、なんとか家に帰そうとしますが、ウリヤは家に帰ろうとしません。

ほとほと困ったダビデは、司令官ヨアブに手紙を書いて、ウリヤを最前線に出して、戦死させよ、と命じます。こうしてウリヤは死に、バト・シェバを妻の一人に迎え入れるんです。このような話

であれば、現代でもよくある話です。

科学は時代とともに確実に進歩していくけれども、どう生きるかという重要な問題を解決する力は、まったく進歩していないと言えますね。少なくとも進歩の度合いはアンバランスです。つまり人間はそんなに変わっていないと言えます。

科学は前の世代の知識の上に立って次の世代に受け継がれますから、時代とともに進歩しますが、人間の進歩はそうはいきません。ですから、時代とともに着実に進歩することはないわけです。

人間の問題を解決する能力というのは、ダビデの時代と今日と、あまり変わっていないのじゃないか、ということなんです。これ、結論の一つになったみたいですね。同時にこれがスタートなのかもしれません……。

最後にお二人にひと言ずつ、まとめとしてご意見をお聞かせいただきました。教会離れ、寺離れということはあるかもしれませんが、人々の真の宗教心までなくなってしまった、とは言い切れないと思うんです。

宗教者として現実をどうご覧になっているのか、宗教に今求められているのは何なのか、ということ。そしてそれに対して、どう答えることができるのかということについて、繰り返しになるかもしれませんが、お考えをお聞かせください。

確かに宗教心は消えていないかもしれませんが。しかし、その質が問題ではないでしょうか。紀元前八世紀の預言者イザヤは神の言葉として、「この民は口や唇ではわたしをあがめるが、心は遠く

司 会

雨 宮

離れている。それは無意識のうちに神の教えを人の教えに置き換えてしまっているからだ」と述べています。聖書では「神を信じなさい」という呼びかけよりも、「神を探し求めなさい」という呼びかけのほうが多いと思います。イエスも「探し求めなさい。そうすれば与えられる」と説いています。

ですから、宗教心があるとしても、どのような宗教心かが問われざるを得ません。錯綜する現代社会にあつてさまざまな問題に直面していますが、解決への道はいつそうわかりにくくなっています。希望を失わずに、解決策を模索するためには、真の宗教心を探し求め、人間を越えたところから来る声に耳を傾けることから始めるべきだと思います。

聖書が「立ち帰れ」とか、「悔い改めよ」と述べるのは、真の宗教心への回帰を求めているからだと思います。

赤尾

イエスは一人の伝道者であり、治療者であつたことも事実。特に治療者としての活動に多くの人々が集まっていた事実があります。福音書は、当時のいろいろな神々や迷信に対抗する手段として必要であり、イエスの活動と四福音書（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ）は一致するものであります。

ここに宗教の尊さが見出せると考えれば理解しやすくなると思います。

キリストとはヘブライ語のメシアであり、ユダヤ教の「油を注がれた者」のギリシャ語であり、神あるいは救済者という意味です。古代ユダヤ教は社会支配のための体制を指すものであり、イデ

オロギー的な側面があったとみるべきで宗教とは一線を画して評価すれば、キリスト教という宗教との違いをみつけ出せるものと考えます。

現代においても、本来の宗教と、イデオロギー的な側面しか持たない宗教まがいのものの区別を、受け入れる社会が正確に認識すべきと考えます。この混乱が宗教心を見失っていると気がつくべき時に来ています。

学校現場や家庭の中で、やはり正確な教えが必要となっています。この点をもっと強く社会に問いかける時と考えます。

宗教とは社会を支配する体制を求めるのではなく、心の扉を開かせ、神との対話を求めることをもっと強いメッセージで示す時と考えます。

長時間、どうもありがとうございました。

司
会

あとがき

雨宮先生は旧約聖書の研究者として大変ご高名であります。旧約の世界と新約の世界との間にどのような相違点が存在するかについて今回の対談の中では明確には述べられていません。ただ、精神的な命と肉体的な死との違いはご説明がありました。

キリスト教における宗教と医療との関係は本文にあります。イスラム文化圏におけるアラビア医学は、インダス文明の流れを汲むアーリア・インド文明に色濃く残され、インドの医療へと受け継がれています。インド文明の中でも特筆すべき発見の一つに、0から9の数字の記数法があり、これによる科学の開化と進展が発芽され今日に亘っています。ヴェーダ聖典の中の一節には精神医療を扱っている部分があります。それは心理要素として表現されているもので、現代医学とはほど遠いものです。またより東に移って中国はといいますと、インド（仏教）の流れを受けつつ、中国名耆婆（ジーヴァカ）による施術の記録が残されています。古い時代より宗教と医療は表裏一体をなしていたことが良く理解できます。地域ごとに生まれた宗教と医療は、これからも我々の身近なものでありつづけると思います。

平成二十一年七月

赤尾保志

【ゲスト】雨宮 慧

あめみや・さとる



1943年

1983年

1997年より

現在

東京都に生まれる

ローマ教皇庁聖書研究所卒

上智大学神学部教授

真生会館聖書センター編集責任者

カトリック東京教区司祭

著書

「正・続 旧約聖書のころ」(女子パウロ会)

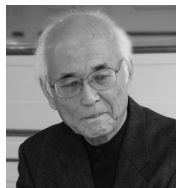
「主日の福音A年・B年・C年」(オリエンズ宗教研究所)

「旧約聖書の預言者たち」(NHK出版)

「図説雑学 旧約聖書」(ナツメ社) など

【司会】草柳隆三

くさやなぎ・りゅうぞう



元NHKアナウンサー。

1937年、神奈川県生まれ。1961年、NHK入

局。松江、仙台、沖縄、東京などに勤務。教育テレビ

「ころの時代」ほか、インタビュ番組やナレーション

番組などを担当。1994年、退職。

現在はNHK放送研修センター日本語センター専門委

員として、言葉に関する講座、研修業務に従事。

赤尾保志

あかお・やすし



1943年、川崎市生まれ。

1968年、慶応義塾大学卒業 東芝機械(株)入社

1978年、財団法人聖マリアナ会 評議員

オリックス・レンテックを経て(株)トライアックス設立

2003年、財団法人聖マリアナ会 理事

2005年、同会 理事長

赤尾保志 対談シリーズ

3

のち
のち